

## 《 寄 稿 》

# 患者図書室における MRSA感染予防の試み

山室 真知子<sup>1</sup> 木下 久美子<sup>2</sup>

## 1. はじめに

当院で入院患者への図書サービスを開始した当時は、患者さんに貸した本から病気が感染するのではないかと危惧が多くの人々にもたれており、公共図書館から団体貸出を受けた時には、“患者には貸出ししない”ことが条件であった。しかしここ数年来は、その疑いも解消の兆しが見られるようになり、多くの病院で院内職員やボランティア、または公共図書館が病院へ出向いての図書の患者サービスもやや活発に行われるようになった。ようやくわが国においても患者のための病院図書室が定着するのではないかと明るい見通しが感じられるようになったその矢先、病院におけるMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）感染がマスコミによって大きく報道され、その存在は院内感染として社会的に広く知られるようになった。それ以来、これまでとは逆な立場からの感染、つまり抵抗力の弱い患者さんに対して図書の貸出サービスがMRSAの感染源にならないか、という不安が一部で高まり、思いがけず感染の問題がまた取りざたされるようになった。

特に公共図書館や院外のボランティアの人々には、このMRSA院内感染についてはマスコミによる一方的な情報のみで、院内感染を理由に、入院患者サービスができなくなるのではないかと不安が高まった。そして、「今後もサービスを継続していく上で、MRSA感染の予防方法があれば教えて

欲しい」、また、「京都南病院の図書室ではどのように患者さんの安全とMRSAの感染予防について対処されているか」、という質問が頻繁に寄せられるようになった。

ちょうど高山赤十字病院でも同じような問題が起こったことから、われわれ医療の現場にいる図書館員として改めてその安全性の確認と予防対策を考えてみることにした。

## 2. 京都南病院での検討と感染予防

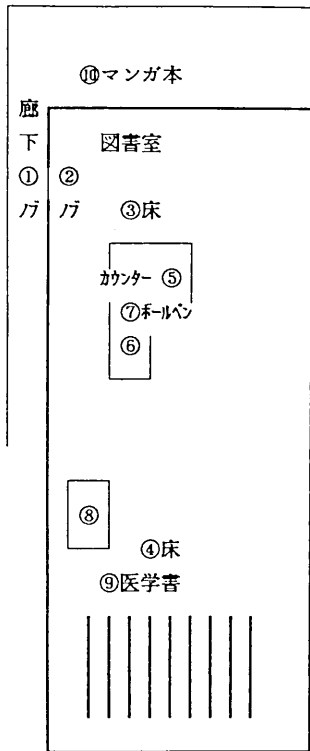
京都南病院では約24年前より入院患者への図書サービスを始め、現在では外来患者および地域住民にもそのサービスの対象を広げてきたが、これまでにこのサービスによる感染の問題は何も起こらなかった。

患者サービスを開始するにあたっては、一応感染の問題についても院内で検討されたが、本を媒介としての菌の感染は考えられないとの結論になり、本の消毒は必要はないとされてきた。しかし病室に持ち込む本は見た目にも清潔であってほしい、ということで本の汚れを落とすことを目的に、返却本のすべて（表紙）をアルコールで清拭することになっている。

MRSAについても本からの感染はまず考えられないとの見解で従来通りのサービスを続けてきたが、この機会に、図書室における患者さんの安全性の確認をする意味で、院内に設置されている「院内感染防止対策委員会」での検討を依頼して、次のような結果を得た。

1. やまむろ まちこ：京都南病院図書室

2. きした くみこ：高山赤十字病院図書室



図書室環境調査場所

- (1) 図書室に来室できる患者の病状は軽症であり、菌に対する抵抗力もあり、感染の心配はない。
- (2) たとえ病菌が本に付着しても、それからの感染はMRSAに限らず、まず考えられない。
- (3) 細菌感染予防が必要とされるIVHを受けながら来室する患者は、主治医の許可を受けて行動しているので心配はない。

さらに、委員会と図書委員長との相談の上で、図書室の汚染状況を把握しておくことも必要であろうということで、図書室内の落下菌およびサービスに携わる司書の保持菌の検査を行ってみたが、いずれからもMRSAは検出されなかった。また菌が図書に付着しているかを調べてみるために、図書室外に置いてある、患者さんが自由に借りられるマンガの本で行ってみた。これらの本は、貸出および返却の際にも司書を経由しないのでアルコールでの清拭は全く行われていないが、菌の検出はなかった。

ただ、図書室入口のタッチ式自動ドアのタッチ

部分よりMSSA（メチシリン感受性黄色ブドウ球菌）が検出され、1日2回、アルコール（70%イソプロピルアルコール）での消毒を行うことになった。この結果、第2回目の検査では菌の消滅が確認されている。

今後もこの検査を繰り返して行い、図書室内の汚染状況をチェックしていく上で、

- (1) 「院内感染防止対策委員会」を中心に安全性についての検討を続ける。
  - (2) 付き添いの人を介して本の貸出をする場合には患者の病状に留意する。
  - (3) ベッドサービスはこれまで通り行わない。
  - (4) 図書室にMRSAを持ち込まぬよう、入口に消毒マットを置く。
  - (5) 患者さんでも簡便に使用できる手指の消毒器を設置する。
- 等を実施し、これまで通りのサービスを続けている。

### 3. 高山赤十字病院における感染予防

高山赤十字病院では、昭和63年にブックトラックでの貸出サービスを開始し、平成4年からは新しくできた患者用ラウンジ（面積220㎡）に木製の本棚・カウンター・テーブルを置いて、図書

表1. 感染防止のための項目

1. 室内の出入口に噴霧式の消毒器を設置して、利用者に手指の消毒をよびかける。
2. 返却された本は、約30分間の紫外線消毒を行う。
3. 感染症で隔離されている病室へは本の貸出ができないことを掲示する。
4. ボランティアはサービスの前後に手指を消毒し、病院が提供するエプロンを着用する。
5. 全図書に“読書の前後には石鹸で手を洗いましょう”のシールを貼付する。

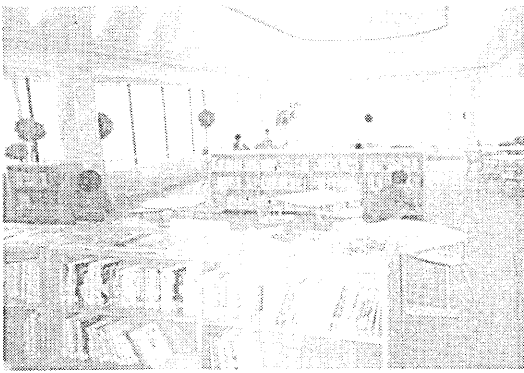


図1. 室内の様子

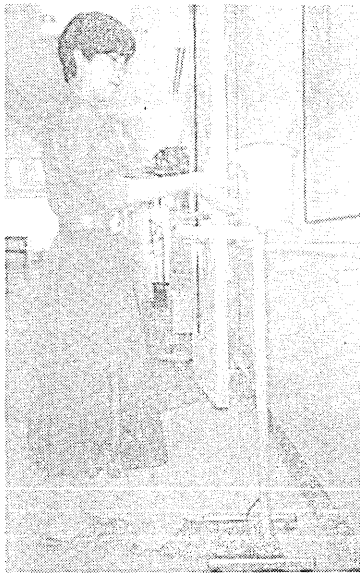


図2. 噴霧式の手指消毒器

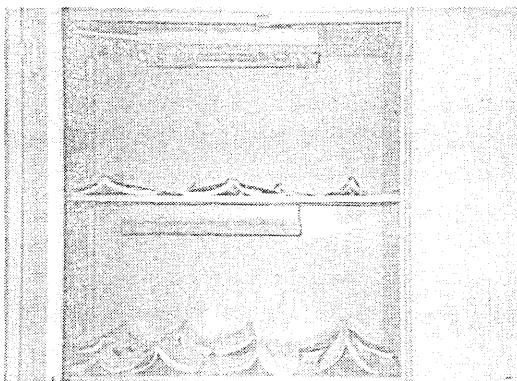


図3. ロッカー式の本棚に紫外線ランプを取りつけた消毒庫

サービスを行っている（図1）。ボランティアの協力により、貸出を週1回から5回に変更して利用者が急増したことから、本を介しての病原菌の感染を心配する声の一部職員からでた。しかし、感染防止のため表1の項目を実施していたこともあり（表1・図2・3）、院内の感染防止委員会では、必要以上に神経質にならなくてもよいとのことであった。

本の消毒については、試みに本の表紙にMRSA菌を付着して、紫外線照射による消毒効果を調べているが、照射時間30分・1時間のいずれも培養結果は（－）で、菌の消滅を確認している。

紫外線を照射するのは表紙（裏表）だけで、全頁に行くことはできないが、本の消毒よりも大切なのは、利用者やサービスにあたるボランティアに本の清潔な取り扱いを指導していくことだと考えている。

#### 4. おわりに

わが国における患者図書サービスが欧米諸国と比較して非常に遅れている原因の一つには、病原菌の感染について正しく理解されていなかったことが考えられる。今後、当然予想されるエイズ患者へサービスをも含めて、感染については常に医学的な正しい知識と衛生管理を考慮しながら、患者のための図書サービスが安全に続けられるように、われわれ病院図書室担当者としても努力していきたいと思う。また患者サービスを行う上で、感染について必要以上の不安からサービスの中止を考える前に、各病院内に設置されている「院内感染防止対策委員会」などに諮り、その見解を参考にしていきたいと思う。

ようやく広がりが見られるようになった患者サービスが再び感染が原因となって、ここで後退もしくは中断されることがないようにと考えて、以上、われわれ二病院で行った安全性の確認、および感染予防の試みを紹介した。

（本文は、1993年6月19－20日開催された第10回医学情報サービス研究大会における発表要旨である。）